

保育者・教員養成課程学生を対象とした「陶芸入門」
における表現と鑑賞を一体化させた指導法に関する研究

—小学校図画工作科の観点から—

A Study on Teaching Method Integrating Expressions and
Appreciation in the Subject of "Basic Ceramic Art"
for Students in Nursery, Kindergarten and Elementary
School Teacher Training Course

—From the viewpoint of elementary school drawing and handicraft department—

本田 郁子

Ikuko Honda

〈摘要〉

本研究は、保育者や幼稚園・小学校教諭を目指す短大生を対象とした専門教育科目「陶芸入門」において、焼き物制作や陶磁器鑑賞を通し、小学校図画工作科の内容「表現と鑑賞を一体化」することに視点をおいた授業の指導法を探る研究である。小学校図画工作科において「鑑賞」や「表現と鑑賞の連携」は「表現」に比べて十分になされていない現状がある。今後保育者・教育者を目指す学生は、美術や地域の伝統文化や美術作品への関心や見識を深め、表現と鑑賞、両者の連携の重要性を感じ取り、保育者・教育者としての素地を養う必要があると考えた。そこで、身近な地域の伝統文化である「陶芸」を題材に、小学校図画工作科における「表現」と「鑑賞」の一体的、往還的な視点を取り入れた授業を実践し、その指導法と学修の効果を探ることを目的とした。授業の展開は、「表現」活動として粘土遊びと焼き物制作、「鑑賞」活動として制作作品と美術作品の鑑賞を行った。授業での学生の様子、レポートの記述内容、アンケート結果より、「表現」「鑑賞」の両者を連携し、一体的に学ぶことにより、学生にとって身近な地域の伝統文化である「陶芸」への興味・関心や、理解の深まりに効果を示した。

〈キーワード〉 小学校図画工作科 表現 鑑賞 表現と鑑賞の一体化 伝統文化
陶芸

はじめに

平成 29 年学習指導要領が改訂され、図画工作科において改訂の趣旨と要点が示された。中央教育審議会答申では、小学校図画工作科、中学校美術及び高等学校芸術科（美術、工芸）における課題について、「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められるところである。」¹と示された。これらの課題を受けて今回の改訂では、「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを一層重視する」、「表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させながら育成すること」を具体的な改善点として、目標及び内容を改善・充実を求めることが示された。

図画工作科の内容は「表現」と「鑑賞」で構成されているが、「表現」に比べて「鑑賞」、「表現と鑑賞の連携」した指導は十分になされていない現状がある。「小学校図画工作科における鑑賞学習指導についての全国調査報告」²における、全国の小学校図画工作科を担当している教員へのアンケート調査では「図工指導の積極性」に比べて「鑑賞学習指導の積極性」や「表現と鑑賞の関連付け」は不十分で教員は指導に苦慮している現状を明らかにした。また、鑑賞には「制作と連動した鑑賞」と「独立した鑑賞学習」があるが、後者においては、時間数の確保の難しさから益々減少、逃避傾向であることを指摘している。その改善策として、図画工作担当の教員に効果的な鑑賞活動の研修を行うこと、小学校教員の免許を取得する学生達が名作鑑賞の魅力を実感し得るような鑑賞機会が提供されることを提案している。

図画工作科の目標は、作りだす喜び「表現」だけでなく、美しいものを感じ取る喜び「鑑賞」も同等であり、両者を関連することにより、より造形の資質や能力を充実していくことができる。しかしながら、図画工作科の時間数の減少や、教員は年々多忙になり、「鑑賞教育」、「表現と鑑賞の連携」についての教材研究や見識を深めることへの時間の確保が難しい現状がある。学生自身が、これまで美術教育において、鑑賞教育や表現と鑑賞教育の連携した授業の経験が乏しい可能性があり、教員として指導する立場になった場合、実践方法やその両者の連携の意義や重要性を見出しにくいのではないかと推測し、多忙な教育現場の現状を踏まえて、十分な学修時間を持つことができる学生の中に「鑑賞」による美術作品との出会い感動の経験を持つこと、「表現と鑑賞の連携」の意義や重要性を感じ取れるような授業を実施することが必要ではないかと考えた。

I. 研究目的

本研究では保育者、幼稚園・小学校教諭を目指す学生を対象に専門教育科目「陶芸入門」では、半期の授業という十分な時間をかけて、焼き物制作、自作の作品と美術作品の鑑賞活動を通し、「表現と鑑賞を一体化」した授業を実施する。この授業を通して学生は、美術や地域文化に造詣を深め、図画工作科における表現活動と鑑賞活動を関連させることの意義や重要性を体験的に学修し、保育者・教育者として図画工作科の指導への素地を固めることを目指す。

この授業では「陶芸」に題材を絞り授業を展開していく。学習指導要領改訂に伴い、地域連携や、生活を豊かに美しく豊かにする美術文化との関わりが一層求められているところである。本学の所在する愛知県尾張旭市は瀬戸市に隣接し、古くから焼き物の伝統文化が根付いている地域である。身近な地域の伝統文化への見識を深め、暮らしに根付いた焼き物への理解を深めることができるという点において、「陶芸」は適した題材であり、焼き物制作や陶芸作品の鑑賞を通して、身近な伝統文化「陶磁器」への理解や見識を深めるきっかけとなる学習活動にしたいと考えた。

II. 研究方法

II-1. 対象

名古屋経営短期大学子ども学科専門教育科目「陶芸入門」履修する、1年生17名を対象とした。

II-2. 授業計画

期間は2018年4月から6月の間8日間、全15回（1コマ90分）の内、第1～14回は2コマ連続、第15回のみ1コマ実施した。陶芸を題材に、図画工作科の内容「表現（造形あそび）」として粘土再生、「表現（絵や立体、工作に表す活動）」として焼き物制作を行い、「鑑賞」として制作した作品鑑賞、愛知県陶磁美術館にて、所蔵される美術品の鑑賞を実施し、焼き物について表現と鑑賞の双方を学習ができるよう計画した。授業計画と概要を表

表1 「陶芸入門」授業計画

表現（造形あそび）	第1回	焼き物基礎知識
	第2回	粘土の再生
表現（絵や立体、工作に表す活動）	第3回	土練り、飯碗成形（玉作り）
	第4回	飯碗成形（玉作り）
	第5回	湯飲み成形（玉作り）
	第6回	飯碗、湯呑み高台削り
	第7回	銘々皿、箸置き成形（タタラ作り）
	第8回	土鈴成形（タタラ作り、玉作り）
	第9回	七輪焼成箸置き（素焼き）
	第10回	七輪焼成箸置き（本焼き）
	第11回	下絵付け、施釉
	第12回	土鈴 アクリル絵の具による着彩
鑑賞	第13回	作品鑑賞（使ってみる）
	第14回	愛知県陶磁美術館見学（解説）
	第15回	愛知県陶磁美術館見学（自由）

に示す（表1）。

II-3. 授業内容

(1) 粘土再生（表現 造形遊びをする活動）

第1～2回では、以下のねらいを持って、粘土遊び、粘土の再生を実施した。素材に十分に慣れ親しみ、性質を知ることや表現方法を模索することは、作品作りの前段階として重要である。粘土遊びでは、様々な粘土の状態（乾燥、泥、粘土）での遊びを体験し、水分量の違いによる粘土の循環的な状態の変化を知ること、粘土の状態の違いを感じ、性質を知ることがねらいとした。

また、小学校教育現場において、油粘土に比べて土粘土の使用機会が少ない原因の一つに、管理方法が良く分からないということが推測される。しかし、土粘土は再生することができる上、焼成することにより独特の美しさや耐久性を備えることのできる、他の粘土にはない特性を持つ素材である。学生が粘土の再生方法や管理方法を学ぶことにより、指導者として土粘土を教材として提供し易くなるのではないかと考えた。

・主な学習内容

①乾燥状態の粘土を感じる

乾燥した粘土の塊を木槌で砕き、篩にかける。比較的粒子の粗い粘土と、細かい粘土に分け、粒子の大きさの違いによる手触りを楽しむ。

②泥状態の粘土を感じる

タライに水を張り、粒子の粗い粘土振り入れる。この際、すぐに混ぜずに粘土に十分に水が染み込ませると粒が残りにくい。泥を手で混ぜたり、泥の付いた手でお互いに握手したりして、触感を楽しむ。

③形作れる状態の粘土を感じる

泥に粒子の細かい粘土を少しずつ振り入れ、形作れる硬さになるよう調整する。ちょうど良い硬さになったら、握ったり、捏ねたり、ちぎったり、形作ったりするなどして、可塑性を楽しむ。活動終了後、粘土はビニール袋に入れて寝かし（粘りを出す為）成形に備える。

(2) 焼き物制作（表現 絵や立体、工作に表す活動）

学生自身が再生した粘土を用いて、作品制作を実施した。「楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う」³ ことに繋がるよう、日々の生活を豊かにできる食器（箸置き、飯碗、湯呑み、銘々皿）と、音色を楽しむことのできる土鈴を制作した。指導計画の作成と内容の取扱いにおいて「児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること」⁴ とある。この授業において、学生達に成形のポイントを示すと共に、簡易に焼成体験ができる実践方法を示した。一般的に図画工作科における焼き物制

作は成形が主活動になり、焼成は委託することが多い。しかしながら、土粘土の魅力は焼成することにより焼き物に変化することである。この授業でも筆者が学外の電気窯で焼成したが、焼成による粘土の変化を学生自身が体験できるように、箸置きは七輪で焼成した。七輪での焼成は吉田（2002）⁵の方法を参考にした。

・主な学習内容

①土練り

土練りの基本である荒練りと菊練りを学習する。

②飯碗・湯飲み（玉作り）、銘々皿（タタラづくり）制作

主に食器を制作した。飯碗・湯飲みは玉作り、銘々皿はタタラづくりで成形した。素焼き後下絵の具（呉須）で下絵付け、透明釉を施釉し本焼きした。

③土鈴制作

二つの成形方法、玉作りとタタラ作りで土鈴を成形した。素焼き後アクリル絵の具で着彩して仕上げた。

④七輪による箸置き焼成

七輪を用いて箸置きを焼成した。タタラ成形で箸置きを成形し、乾燥後、七輪を用いて素焼きから本焼きまでを行った。

(3) 陶磁器鑑賞（鑑賞）

図画工作科の改訂に伴い、求められている方向性について「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深める学習の充実を図る。」⁶と示されている。これらを学習することをねらいとし、自分の作品を使う・互いの作品を鑑賞する活動、美術館での陶磁器作品を鑑賞する活動と、二つの鑑賞活動を実施した。

①制作作品を使う・相互に鑑賞する

自作の銘々皿に茶菓子を盛り、湯呑みにお茶を入れて実際に使用した。また、自分の作品のコンセプトや工夫した点などを友人に説明すること、併せて友人の作品の良いところを見つけて伝える、という相互に作品を鑑賞する活動を行った。

②愛知県陶磁美術館にて陶磁器鑑賞する

学生には筆者の作成した鑑賞活動レポート用紙を配布した。学生は、学芸員による愛知県陶磁美術館の概要説明、常設展における作品鑑賞では、時代の流れに沿って縄文時代から近代に至るまでの日本の陶磁器を中心に実際に作品に触れ、それぞれの作品解説を受けながら、学んだことや感じたことを記録した。その後館内自由見学とし、各自興味・関心を持った作品をスケッチし、作品の解説を記録、作品を見て感じた事や考えたことを記録した。

II-4. 分析方法

授業の様子や授業内での学生の発言や筆者の観察記録、学生の「陶芸入門レポート」による授業についての感想や学んだことについての自由記述、授業後に実施した「陶芸入門アンケート」の結果と合わせて分析する。

III. 倫理的配慮

学生には授業の始めに研究の趣旨を伝え、ビデオ・カメラで撮影した記録、レポートの記述内容、アンケート結果は、論文掲載の際は個人が特定できないよう配慮した。

IV. 結果

15回の「陶芸入門」授業を終えて、レポートによる記述、アンケートを実施した。記述については一部を抜粋し、類似したものはまとめて記した。また筆者の授業観察を記した。

IV-1. 「陶芸入門」レポート記述内容

(1) 「表現活動 粘土再生から制作を終えて」の記述内容

記述内容を、授業内容と図画工作科における育成を目指す資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性」）の二つの観点から分類し表にまとめた（表2）。

記述内容から、学生は一連の焼き物制作を通して、「知識や技能」「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性」の3つの資質・能力が育成されたことが伺える。

「知識や技能」とは、表現及び鑑賞の活動を通して知識や技能を身に付けることである。粘土再生では、学生の授業の様子では、粘土再生では童心に帰ったように泥遊びを楽しむ様子が見られた。粘土状になると、ちぎったり、丸めたり、形作る様子も見られた。学生の多くは、焼き物作りのイメージは成形中心で、記述内容に見られるように粘土の再生は初めての学習する学生が多く、これらの経験を通して粘土再生法の知識を得るだけでなく、自分感覚を通して土の特性を知ることができ、材料への理解を深めることができたと考えられる。菊練りの習得は難しく、器と土鈴の成形では、手間取って素早く成形できない為粘土が乾燥してひびが入る、形が広がりすぎるなど、思い通りに上手かない様子が多く見られた。しかしながら、記述内容から、難しくも楽しい作業であったことが伺え、材料や道具の使い方を工夫しながら、技能の習得に意欲的に取り組む様子が見られた。

「思考力、判断力、表現力等」とは、造形的な良さや美しさ、表し方について考え発想や構想することである。記述内容にも見られるように、お互いの作品を見たり、話し合っ

表2 「陶芸入門」レポート記述内容

(1) 「表現活動」粘土再生から制作を終えて気づいたこと、学んだこと、感想等

知識及び技能	粘土再生について	<ul style="list-style-type: none"> 粘土再生の工程をみた事がなかったので良かった。 水がいきわたって粘土になっていって、こんな風を作るんだと勉強になった。 粘土が焼くまでは何度でも再生できると学び、とても驚いた。
	土練りについて	<ul style="list-style-type: none"> 菊練りが上手くできなかったのが悔しい。練習が必要だと実感し再チャレンジしたい。 荒練り菊練りが難しく、マスターするには時間が必要だと思った。 菊練りでは花みたいな形に空気を抜くことができず難しかった。
	器成形について	<ul style="list-style-type: none"> 玉作で穴を空けて広げていく作業が難しかった。 乾燥してひびが入ってしまったので、次は時間をかけないようにしたい。 広げた粘土を戻したり、乾燥した粘土を戻すのは難しいと感じた。
	土鈴成形について	<ul style="list-style-type: none"> 二種類の成形方法を知り、楽しかった。
	絵付けについて	<ul style="list-style-type: none"> 筆の使い方や線の太さや雰囲気が変わること気づいた。
	施釉について	<ul style="list-style-type: none"> 混ぜが足りず、均一に掛けられなかった。次は気を付けたい。 作品によって、持ち方や掛け方が違って難しかった。
	作品制作全般について	<ul style="list-style-type: none"> 一つの焼き物を作るのに沢山の工程があること、丈夫で使い易く見た目でも楽しめる物にする為には工夫が必要だということを知った。
	思考力、判断力、表現力等	土鈴成形について
絵付けについて		<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな絵を描けるのが楽しい。
七輪焼成について		<ul style="list-style-type: none"> 作品を七輪で焼いたのは印象的だった。 赤く燃えて艶が出て、普段見ることができないので新鮮で楽しかった。
鑑賞		<ul style="list-style-type: none"> 友人の作品を見て、次回からの参考にしたいと思った。
作品制作全般について		<ul style="list-style-type: none"> 粘土に触れてとても落ち着いた気持ちになった。
学びに向かう力、人間性等	絵付けについて	<ul style="list-style-type: none"> 思い通りにいかなかったが、焼き上がってみたら意外と上手くできて嬉しかった。 時間が足りず、前日にアイデアを考えてこれば良かった。
	作品制作全般について	<ul style="list-style-type: none"> 土作りから作品を作るのは楽しく、子ども達と楽しく造形ができると思った。

表3 「陶芸入門」レポート記述内容

(2) 「鑑賞活動」自作の器を使って、気づいたこと、学んだこと、感想等

思考力、 判断力、 表現力等	<p>使い心地について</p> <ul style="list-style-type: none"> • お茶碗は焼き上がったら、とても小さくなり、湯呑みは薄すぎて熱くて持っていられなかった。使う人のことを考えた思いやりが大切だと感じた。 • 湯呑みと茶碗はもう少し大きくした方が良かった。 • 湯呑みは熱いお茶を入れた時熱かったので、高台をもう少し高くすれば良かった。 • 湯呑みは手に収まる小さめのサイズで飲み易かった。 • 湯呑みの口がでこぼこしていて飲みにくかった。 • 釉薬を付けすぎてしまった所は、ぼこぼこしていて使いにくかった。
	<p>仕上がりにについて</p> <ul style="list-style-type: none"> • やや変形させた器を作ったが、意外と持ちやすかった。 • 猫型の皿に菓子を乗せると、猫が持っているようで可愛かった。 • 茶碗は形良くできましたが、もう少し大きく作れば良かった。 • 下絵の具をもう少し濃く描けば良かった。 • 釉薬を付けすぎて、白く残ってしまったが、味がありまあまあの出来かなと思った。
学びに向かう 力、人間性等	<p>使い心地について</p> <ul style="list-style-type: none"> • 口回りがザラザラしていて少し痛いことと、ひびが多いので次回は改善したい。
	<p>仕上がりにについて</p> <ul style="list-style-type: none"> • 湯呑みの中に傷や、釉薬が固まっているところがあり、気を付けてまた作りたい。
	<p>作品について</p> <ul style="list-style-type: none"> • 今まで器を作ったことはあっても、使ったことはなかったので感動した。 • 自作の器を使うと食べることが楽しくなり、ずっと見ていても飽きないぐらいの宝物になった。 • 自分の作品が使えるかどうか不安だったけど、ちゃんと使えて嬉しかった。これからも家で使いたい。 • 家で作品を使って改善点を探り、次回の制作に生かしたい。 • 湯呑みが小さすぎたが、つまようじ入れにちょうど良く家で使うようになった。 • 皿は家で使っていてお気に入りになった。

たり、自問自答しながら、どのような形、絵柄にしようか構想を膨らませながら制作していく様子が見られた。

「学びに向かう力、人間性等」とは、主体的に表現したり、鑑賞したりする活動を通して作りだす喜びを味わうとともに、形や色など楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うことである。学生達は、制作を通して、反省点や改善方法を探ったり、作る楽しさを感じたり、焼き上がった作品を見て喜びを感じている様子が見られた。

(2) 「鑑賞活動 自作の器を使って」の記述内容

授業内容と図画工作科における育成を目指す資質・能力（「思考力、判断力、表現力等」、 「学びに向かう力、人間性」）の二つの観点から分類し表にまとめたについて分類し、小学校学習指導要領による図画工作科の目標に分類し表にまとめた（表3）。

記述内容には器の大きさや形、高台の高さ、口や表面の仕上がり、絵付け、釉薬の仕上

表4 「陶芸入門」レポート記述内容

(3) 「鑑賞活動」愛知県陶磁美術館での鑑賞を終えて、気づいたこと、学んだこと、感想等

知識	<p style="text-align: center;">焼き物知識について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書でみた事のある焼き物が沢山展示されていて、驚いた。縄文土器を始め、先人が工夫して進化させていった作品をじっくり観察することができた。 ・時代が進むにつれて、焼く温度が高くなり丈夫に光沢が出る進化はすごい。 ・技術が進化していく様子や、様々な作り方があり、感心した。 ・用途によって様々な大きさ、形、色の焼き物があることを知った。 ・展示作品の用途を推測しながら鑑賞し、昔の人ならではの予想外の使い方をする作品もあり驚いた。
思考力、判断力、表現力等	<p style="text-align: center;">作品から感じた事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縄文土器を実際に触り、とてもうれしかった。砂っぽくてザラザラしていた。 ・パンフレットで見た作品は、実物は光の当たり具合でキラキラしていたり、青がキレイだったりして全然違ってていた。写真ではわからないことが多いと感じた。 ・藤井達吉コレクションに、ぶどうが描かれている作品が多く、「ブドウが好きだったのかな。」「ブドウが流行っていたのかな」など想像できて楽しかった。 ・イサム・ノグチ作「旅」を見て、自分は脚が刺さってのかなと思ったが、友人が「杖だ」と言っているのを聞き同感した。 ・海外の作品には派手で印象的な作品が多く衝撃を受けた。今後の作品作りの参考にしたい。 ・屋外に大きな像が展示してあり、大きいものも作ってみたいと思った。 ・陶芸作家の茶碗で頂く抹茶、静かな空間、きれいなお菓子は最高だった。
学びに向かう力	<p style="text-align: center;">焼き物への興味・関心</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めて行ったが、縄文土器や埴輪を実際に目にし、作品を見る事が好きになった。また行ってもっと沢山見てみたい。 ・授業で少し作品を作ったので、日本や世界中の陶磁器を見て、更に興味がわいた。 ・初めて陶磁器をじっくり見る事や知ることができ、楽しかった。次はゆっくり見に、抹茶も飲みに行きたい。 ・楽しくなさそうだと思っていたが、焼き物の歴史を知ったり、作品に実際に触ったり、貴重な体験ができ、また行きたい。 ・あまり興味がなかったが、実際に作品を見たら、色使いや繊細な作り方に目を惹かれた。また時間ができたら行ってみたい。

がり、持ちやすさ、料理を盛った時の美しさ等が多く見られた。見た目だけでは分かりえなかった、使い心地や仕上がり等多くの事に気付いたことが見受けられる。器は本来料理を盛ってその美しさを発揮するものであり、使うことにより手や口の触覚を通して見た目だけでは分かりえなかったことに気付くのである。使って鑑賞する行為から学生は自分の感覚を通して、作品の良さや改善点を、つまり「思考力、判断力、表現力等」を深めている様子が伺える。また、「焼き上がった作品を家で使い続けたい」等生活を豊かにしようという態度、つまり「人間性」や、改善点を見つけたことにより、もう一度作ってみたいという「学びに向かう力」についての記述が多く見られた。

(3) 「鑑賞活動 愛知県陶磁美術館での鑑賞を終えて」の記述内容

授業内容と図画工作科における育成を目指す資質・能力（「①知識」、「②思考力、判断

表5 「陶芸入門」レポート記述内容

(4) 受講を終えて、気づいたこと、学んだこと、感想等

学習内容について
<ul style="list-style-type: none"> ・モノづくりが好き（上手とは言えないけれど）なので楽しかった。 ・とても楽しく貴重な体験ができた。 ・粘土を形にするだけかと思っていたが、多くの工程があり大変だった。 ・粘土再生や焼成など、初めて経験し楽しかった。 ・粘土再生から練り方、成形方法の種類、焼成など学ぶことが沢山あり楽しかった。 ・難しかったけど、たくさん作れて楽しかった。 ・作るの難しかったけど、自分たちで焼いたりとかして楽しかった。 ・専門的な知識や技術を学ぶことができ、陶芸への興味を深めることができた。 ・友達とアイデアを出しながら作る時間も楽しかった。
作品について
<ul style="list-style-type: none"> ・とても大変で難しかったけど、その分作品に愛着がわき、家でも使いたいと思った。 ・時間をかけて作った自分の作品は、不格好ですが、体験と共に宝物になった。 ・作品が日常生活で使えるのでいいと思う。
今後の意欲
<ul style="list-style-type: none"> ・陶芸の事をもっと知りたい作品を作ってみたいと思うようになった。 ・瀬戸焼など身近な町があるので、作品を鑑賞したり参考にしてもう一度作ってみたい。 ・楽しかった。また絵付けをやってみたい。
保育・教育者としての視点から
<ul style="list-style-type: none"> ・粘土の再生方法など、実践的なことも学べて、今後の学習や実習に役立てたい。 ・粘土再生から知り、将来子どもに最初から教えてあげられるので勉強になった。

力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性」)の二つの観点から分類し表にまとめた記述内容について分類した(表4)。

記述内容に見られるように、大多数の学生が学芸員の解説を受けながら美術作品を鑑賞することにより、焼き物への「知識」を深めることができ、美術作品を鑑賞することで感動が得られたという記述内容が多く見られ、焼き物への興味や関心が深まったことがわかる。陶磁器作品は写真や図版では、細部や輝きが分かりにくく、大きさの実感が掴みにくい。実物を見たり触ったりする事により、作品について見方や感じ方、つまり「思考力、判断力、表現力」を深めることができたことが伺える。また、実物を鑑賞することにより、興味・関心や感動を得ることができ、「もっと見たい」「また行きたい」など「学びに向かう力」に繋がっていったことが伺える。

(4) 「受講を終えて」について記述内容について

記述内容について次の四つの項目、「学習内容について」「作品について」「今後の意欲」「保育者・教育者の視点から」に分類した(表5)。

学習内容について、工程が多くて大変だった、難しかったが楽しかった、よい経験ができた等の記述内容が見られた。友達と対話しながら制作をすることにも楽しみを見出している。作品については、不格好だが、自分の作ったという経験と共に愛着を感じたようで

表6 「陶芸入門」アンケート結果

(1) 学生自身について

(1)-1 あなたの美術との関わり方についてお答えください。(複数回答可)

趣味的作品制作	課題作品制作	マンガやイラストを描く	画集・作品集の鑑賞	美術館や美術展等での作品鑑賞
2	13	4	3	1
美術番組やDVDなどでの視聴	その他			
0	1			

その他内容……TV・ゲーム・アニメーションの視聴

(1)-2 あなたは美術館博物館、画廊、ギャラリーなどで作品を鑑賞する機会をどのくらいの頻度で持っていますか。

年に3回以上	年に2回程度	年に1回程度	2年に1回程度	3年に1回以下
1	1	2	2	7
無回答				
1				

(1)-3 制作活動(描いたり、作ったりすること)は得意ですか。

得意である	どちらかといえば得意である	どちらでもない	どちらかといえば得意でない	得意でない
0	3	5	5	1

ある。授業を経て、作品を鑑賞して見識を深めたい、再度作ってみたい等、陶芸に対する興味関心が深まり、今後の意欲が見られた。

IV-2. 陶芸入門アンケート結果

15回の授業終了後、受講者17名へアンケートを実施した。有効回答者数は14名、数字は回答数または回答者数を示す。

(1) 学生自身について

学生の美術への関心について調べた(表6)。(1)-1より、学生の美術との関わり方は「課題作品制作」が大半を占め、「美術館や美術展等での作品鑑賞」は1名、「美術番組やDVDなどでの視聴」は0名であった。また、(1)-2「美術館博物館等で作品を鑑賞する機会」についても「3年に1回以下」が半数を占め、普段の生活において美術作品への興味・関心は低いことが分かる。(1)-3「制作活動は得意か」という問いに、「どちらでもない」から「得意でない」を合わせると11名で全体の三分の二を占め、苦手意識のある学生が多い。

表7 「陶芸入門」アンケート結果

(2) 「陶芸入門」受講当初（受講前）について

(2)-1 陶芸の経験はありますか。

ある	ない
6	8

その他内容……TV・ゲーム・アニメーションの視聴

(2)-2 愛知県陶磁美術館での作品鑑賞に興味・関心はありますか。（受講前）

ある	どちらかといえば ある	どちらでもない	どちらかといえば ない	ない
0	4	4	1	5

(2) 受講当初（受講前）について

受講前の学生の陶芸への経験、鑑賞への興味を調べた（表7）。(2)-1より、陶芸の経験のある学生は6名である。(2)-2より「愛知県陶磁美術館での作品鑑賞に興味・関心」は「どちらでもない」から「ない」を合わせると10名で全体の三分の二を占め、関心の低さが伺える。

(3) 受講を終えて

受講を終えて学習効果、作品鑑賞に対する学生の意識変化を調べた（表8）。(3)-1「粘土再生経験の有用性」については13名、(3)-2「作品制作経験の有用性」については11名、(3)-3「作品鑑賞経験の有用性」については10名が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、粘土再生経験についてはほぼ全員、作品制作経験、作品鑑賞経験については全体の三分の二が有用であると感じている。

(3)-4「愛知県陶磁美術館での作品鑑賞を終えての興味・関心」については10名が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、(1)-2受講前「どちらかといえばそう思う」4名に比べて、興味・関心を持つ学生が二倍以上に増えた事がわかる。(3)-5「作品を使う鑑賞を終えての興味・関心」については半数以上の8名が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、二つの鑑賞活動について学生の興味・関心が深まり学習効果が見られる。

次に、(3)-6「土作り、作品成形、作品鑑賞を含んだ授業を経験による、焼き物への興味・関心」については半数以上の9名が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、「表現」「鑑賞」の一体的な学習についての効果が見られた。

(3)-7「再度焼き物を制作したいか」、(3)-8「再度愛知陶磁美術館にて作品鑑賞をしたいか」については半数以上の10名が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、授業を経て陶芸に関する興味・関心が深まると共に学習の更なる意欲が伺えた。

表8 「陶芸入門」アンケート結果

(3) 「陶芸入門」受講を終えて

(3)-1 保育者・教育者として学ぶ上で、粘土再生の経験は有用であると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7	4	3	0	0

(3)-2 保育者・教育者として学ぶ上で、作品制作の経験は有用であると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
6	5	2	1	0

(3)-3 保育者・教育者として学ぶ上で、美術館（陶磁美術館に限らない全般）での作品鑑賞の経験は有用であると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4	6	2	2	0

(3)-4 愛知県陶磁美術館での作品鑑賞を終えて、焼き物についての興味・関心は深まりましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4	5	4	0	1

(3)-5 焼成後に自分の作品を使ってみると同時に、自分や友人の作品鑑賞を終えて、焼き物についての興味・関心は深まりましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
5	3	5	1	0

(3)-6 土作り、作品成形、作品鑑賞を含んだ授業を経験することにより、焼き物への興味・関心は深まりましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4	5	4	1	0

(3)-7 機会があれば再度、焼き物を制作したいですか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4	6	2	2	0

(3)-8 機会があれば再度、愛知陶磁美術館にて作品鑑賞をしたいですか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらでもない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
3	7	2	1	1

V. 考察

本研究では「陶芸」に題材を絞り、「表現」として焼き物制作、「鑑賞」として自作の作品と美術作品の鑑賞活動を連携させた授業を実施した。学生が地域の伝統文化や生活で関わる物への見識や理解を深め、「表現と鑑賞を一体化」したことの意義や重要性を体験的に学修し、保育者・教育者としての素地を固めることを目的とした。

学生達は、「陶芸入門」の授業を通して、「作る楽しさ」と「見る楽しさ」、相互の関連により学びが深まったと考える。図画工作科においては「表現」活動に比べ、「鑑賞」や両者を連携させた活動が不十分な現状がある。この現状を改善する手立ての一つとして、教員を目指す学生が、美術作品を鑑賞する喜びや、表現と鑑賞を連携することによる学びの深まりを十分に感じる事が重要だと考える。

本研究の対象学生においては、美術への関心が薄く、作品制作においては苦手意識持つ者も多かった。しかしながら、授業を通して粘土再生から焼成までを含む焼き物制作を経験し、難しく工程が多く大変と感じながらも、楽しい、もう一度作ってみたいという次への意欲を得ることができた。レポートの記述内容には「子ども達と楽しく造形ができると思った」とある。図画工作科の目標は出来の良い作品を作るだけでなく、豊かな感性を育むことや、学びに向かう力を養うことにある。まず学生自身が焼き物制を通して、「思い通りにいかないが楽しい、悔しいからもう一度やってみたい」と喜びや挑戦したいと感じる事に大変意義があると考える。そしてその感動を子ども達に伝えることが保育者・教育者としての役割であり、今回の制作活動では効果が見られたと考える。

制作活動や鑑賞活動では学生同士が互いの作品を見たり、作品についての意見交換をしたりすることが活発に行われたり、作品制作の場面においても試行錯誤する姿がみられた。学習指導要領の改訂に伴い、「主体的で・対話的で深い学び」の推進が求められている今、作品制作や鑑賞活動を通して、友人との対話や自己の経験による自分との対話により学びを深めることのできる図画工作科は、教科としてその価値を見出すことができるのではないだろうか。

自作の作品を使ってみる鑑賞活動では、手触りや口当たりから多くのことに気づき、改善点を見出し次の制作意欲に繋げたり、自作の作品を家で使い生活を豊かにしたりする心が育まれたと考える。このことは図画工作科が充実を図ることが求められている「生活や社会と豊かに関わる態度を育成する」ことに即していると考えられる。次に、美術作品の鑑賞活動であるが、受講前の陶磁美術館への関心は低く、見学前にはあまり興味がなかった。しかしながら、学生は、陶磁器の歴史や焼成方法や用途を知ったり、実物を見て美しさを感じ取ったり、実際に作品に触れることにより興味や関心が生まれ、感動が得られた事が伺えた。陶磁美術館鑑賞後の記述には、「また行ってみたい」、「もっとゆっくり鑑賞したい」等の記述が多くみられた。これは、焼き物の知識を得ることと、実物を鑑賞すること

による相互作用による興味・関心の深まりが見受けられ、美術館での鑑賞の意義が伝わり、学習の効果があったと考える。

「表現と鑑賞の連携」について、学生の記述内容には「授業で少し作品を作ったので、日本や世界中の陶磁器を見て、更に興味がわいた。」とあった。作品を作ることで陶磁器への関心を持つきっかけとなり、美術作品を鑑賞することにより更に興味関心が深まり、次への制作意欲が伺え、表現と鑑賞を往還的に学習することができた。作品を制作する上で、過去の美術作品から学ぶことは大変重要である。制作と鑑賞を繰り返すことにより、作品への見方や考え方を深めることができ、美しさを感じる心や更なる制作への意欲が育まれるのである。今回の授業では「陶芸」という題材に絞って「表現と鑑賞の連携や一体化」した授業を実施した。学生は、地域文化である焼き物への関心を得るきっかけや、作品制作と鑑賞は密接に関連し、両者を学ぶことにより、作品への理解、興味、関心の深まり、豊かな表現力を養うことに効果があることを体験的に感じながら理解できたのではないかと考える。

今回の授業で表現と鑑賞を一体的に学ぶことにより、陶芸への興味や関心が深まったと考える。この経験を通して、今後保育者・教育者として、子ども達に物を作ること、見ること、使うことの楽しさを伝え、生活を豊かにしようとする態度を育むことへの視点を持って指導に当たって欲しいと思う。

註：引用文献・論文

- 1 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編』日本文教出版株式会社、2018 年、p. 6
- 2 松岡宏明、研究分担者：赤木里香子、泉谷淑夫、大嶋彰、大橋功、萱のり子、新関伸也、藤田雅也「小学校図画工作科における鑑賞学習指導についての全国調査報告」日本美術教育学会学会誌（301）、2017 年、pp.60- 67
- 3 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編』日本文教出版株式会社、2018 年、p. 9
- 4 同上 p. 120
- 5 吉田明『自分で焼ける 何でも焼ける 決定版 七輪陶芸入門』株式会社主婦の友、2002 年
- 6 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編』日本文教出版株式会社、2018 年、p. 6